櫻品

上

別置

和装本

二奴14
716
1

門 二奴14
號 716
卷 1-2

一序

[illegible]

[illegible]

彼之諺に人命

例の郎無も[illegible]

名木ハ名人達の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]新話全

本邦草木之花可愛者
甚多矣然櫻則不名直
曰花乎天下之真花櫻
樣乎名之美者ふ偽樣の劣
也其愛之妙此其為花

富貴而艷又含函兼花之
鍾其義冠諸花可知也吾
如菴先生嘗著櫻品而羅
櫻之品類大備矣然妙桐
苔草辨重辨和文未稱呼

又係鄉名此類甚雜和辨
頃日鈍翁子介予陸先生櫻
品參考諸說考其雅者以
國字並寫花形示予愛花
者如石所櫻頌之梓鈍翁

子能知因門其面事以先生
餘意云耳予雖誅探餘遂
述之槩而之序甲寅之書
平思誅齋

怡顏齋櫻品叙

洛陽牡丹西蜀海棠日本櫻花單稱
花而不名之而人皆知其為牡丹為
海棠為櫻花其為人所貴重也可知
矣古人以侈屈刺充漢土櫻桃者蓋
既誤矣櫻桃是乃郁李之屬而與侈
屈刺絕別殊不知我邦之櫻乃垂絲

海棠也前輩品評櫻花者皆不辨二物之異妄引荆公景濂詩以證之何攷索之疎謬乎夫王宋二氏者皆不識我邦之櫻唯因人語傳聞其名漫寄題烏耳何足以為證哉而其詩所謂山櫻抱石映松枝者乃是櫻桃別種已非伉屈刺讀者不察以為山中

櫻花誤也又或以糸櫻充垂絲海棠亦偏也垂絲是伉屈刺之總称不独指糸櫻予譜中既詳之今不復贅夫櫻花者天下之奇觀群芳之魁首可以與玉蘂丹桂相伯仲上自王公下至士庶莫不愛賞者故古今之題詠載三七之撰凌雲經国之編者爛爛

溢乎緗帙異種代出奇花年新不知其幾百千種也景濂所謂愛櫻日本盛於唐信哉夫三春之壯觀獨称此花而其他則瑣々碎錦斷綉耳何足數哉然兼好法師偏賞單辨山花却謂重葉者為異様而劣何好尚之奇僻乎夫愛山者貴其高且大賞水者愛其深而廣賞花者獨不然乎宜無若富且麗非富麗則不足以稱花矣兼好独愛短葉嗇花者賤重葉富麗者此又不愛繁花耽緣陰之徒歟皆出於隠淪枯寂数奇之趣而非公平正大之心也不特花而已其好奇厭常悖人情以為高刻絶俗得物外之

趣而自不知覺其偏僻齷齪不通于君子大雅之道無華夷典古今學者往往有此弊可以自戒為予固非好羨麗者只恐後生之傚効好之僻愛故論及之予豈好辯吾不得已也先儒活所翁作譜凡十五種遺漏猶多且有差謬予增添數十種勒為一冊

名曰櫻品此固非欲示大方只將冀時々繙攤吟翫常惋然坐對櫻衢之觀平泉之賞云享保改元仲夏日恕菴松玄達成章書于怡顏齋

櫻譜序

凡。至尊者不名而知不特帝王侯伯而已。於樹花亦然。洛陽牡丹。西蜀海棠。日本櫻是也。牡丹。海棠。皆各有譜。余。獨憾櫻之未也。信筆作譜。亡慮十有五種。然

有一種。而小異者。有州郡異名者。有因土壤。而肥瘠不同者。有隨寒暄。而開落異者。有隨雨暘。而色香不同者。則人必曰。不盡於此譜。此惟記余所聞耳。觀荊公山櫻詩。則中華不可謂無奐茲華。茲華不可謂無香。惟各有土宜。而奐桐谷鹽竈之類。故土人不甚玩者耳。亦猶如此邦。奐御衣黃。白舞。青猊。之屬。巖惟省謂。宋諸賢集中。不得見之。嘗質南遊者說云。彼方奐此

種。則皆不之深考也。書以告同志者。丁亥春三月活耶識

奈波道圓

羅山隨筆曰。日本稱櫻花曰花猶如洛陽牡丹。成都海棠也。中昔詩文未多詠櫻花者。我朝文字禪者。取王荆公。山櫻抱石映松枝詩。以為是。雖然余嘗見全芳備祖。櫻桃下載此詩。則與我朝所稱之花不同。然則中華詩

人所詠櫻花是櫻桃也。古詩山櫻發
欲燃。唐詩白櫻桃下紫綸巾。皆是歟

櫻辯

山崎闇齋敬義著

和國ハ專花ト云ハ櫻ニ限リ櫻ニ
詠ジ給ヒ歌ヲ初メ給ヒシ花神代ヨリ
ヤ大山祇の女ニ坐シ
櫻の樹ヲ給ヒ木花開耶
姫ト申ス皇代ハ及ンデ履中天皇

林池の御船あそびよ櫻花の蔭くゝ
御簾を巻て入り給ひ賞し内裏を若樹の
宮と名付給ふ平城天皇の御制歌

昔在巖下光華照四方忽逢攀
折客含笑百三陽送氣時多少垂
陰枝短長如何此一物擅義九春
場

と宮り凌雲集小出嶋峨天皇
弘仁三歳二月小神泉苑小行幸ありく
花宴御遊し詩作らしめ給ふ
花の宴の遊觴りく文徳天皇仁寿
元年小藤原良房の館よ行幸ありく
櫻花宴御遊て詩歌の御遊ありく多
天皇寛平七年神泉苑の櫻を御覽じ

官亟相供奉するしかくとてやし
葉平のうくふ

在の中小路くに橘のおうをは
玄のさ〻路いのくもかまし

と云て天喜四年小櫻花宴殿新小
路く記をとゝ清輔が袋中ゐる
見くゝう諸越そ牡丹花王と云て

さ〻く櫻を用ひざるや詩人の歌詠も
多くに見くど千武陵が白櫻樹の詩よ
記得花開雪滿枝和風和蝶帶花
移只今花落遊蜂去空作主人惆
悵詩

といて萬首唐人絶句第八卷小出う
唐の歐陽詹が歳前の櫻蕊の未折と見く

山櫻先春發紅蘂滿霜枝幽處竟誰見芳心空自知似分朝日照疑畏曉風吹欲問含彩意恐驚輕薄兒

とゝ十二詩選小出ゝ宋の王安石

山櫻の詩

山櫻抱石蔭松枝並比餘花發最遲賴有春風嫌寂寞吹香渡水報人知

といつゝ文甫集第廿八卷小見ゝゝ

さゝ彼國も曾く愛ゝる人なき

小もあゝびを色のの詩を吟ぶなゝ

我国の櫻かくのごとゝ諸越の楊桃

楊の変あゝびとゝふ人あゝど然ゝも

あらびたる叶を見るに小櫻桃の花の枝
葉の枝實のもるる夏皆さくとも乃
梅のごとし但其時節さくらもやし
さくらんぼ苅ゝ詩を金芳備祖の
櫻桃の下小柔なるを見るに蹄もあり
ゆや楊廷秀乃が櫻桃の詩ゝ
櫻桃花発滿晴柯不睹嬌嬈只睹

多落盡江梅餘半朶依然風韻合
還化
といつるい梅の愛ゝ強小者まつり祝氏
が支文類聚の菓實の部ゝ櫻桃を
いざしく廷秀乃が詩い震国の下ゝ入
ぬるとば花を實ゝ小珍重し
ごと云ふべし明の林子亜鳴が多識篇ゝも

櫻桃の外に別に櫻なし

櫻花辞

日本おなじく花と賞するは櫻なり
いにしへも梅は咲きしく花とのみ詠
ナリ人ら集ふ後櫻をぞ愛するなれば
八雲御抄にも近代は唯花と讀るは
櫻なりとあり宣しく花の長みく

代々花の嘉の記録あまた也清輔が
奥義抄云紀貫之の歌よ

櫻ちりまがふ花なき花なまた
あさしの系本ものおもしろくよ

と詠ぜられしも人々貴賤雅
俗の賞翫見よかぐあり作り抜き花よ

作頼斎松園先生櫻品あたをくく
實録ものこの事又見聞の面白紙
補益しなる所真門人甲敬元子授
面あるく全部なる將毎品花形
詳よ摸ととくも艶々何ぞ業
よ及ぶいでや清水和言抜叶よ小
孫よ物ものの櫻山吹と書しいさも

さてさ爲ん人此よ百信の夜話
虚しひまと示云

芦田鉞永

凡例

一 日本六十餘州より櫻樹かるべ取分
山城大和河内和泉攝津此五ヶ國
殊多し今此書るも唯品類而已を
載く名取の櫻いに後編より殊ことに
あらど古今一品ゝ名所の
樣ぐも悉記を辟言び鑑倉の相答

津國伊勢なるの櫻なれども諸處にも
植廣まりて一品なれども世人是を尚賞
故に奥ふかきに又世に名高きも
まことに一品なるべきはいまよ除く津國
金剛なる洛東地主櫻西山西行櫻或い
鞍馬の渦櫻の類也其外地名ふるり
古歌よりよりて名ありしものあり

家櫻墨染櫻滝櫻雲井櫻是なるの
類挙て討へがたし故引歌を出し
奥小陸を

一

花五瓣なるもの試單とし其餘
皆重なるもの俗呼んで單の
餘を重瓣といひ瓣多き式子瓣と
花瓣実重も成とよりを万瓣と

さくらの今は書もをかゝれど

一同名異花同花異名一種二名二種

一名同名別種こゝに條下に詳に記

一種類多く一品なるハ目録に其一名を

除しくを或分ちて

開花の時候凡定まりあるといへども

土地の寒暖歳々の順序ふるうく

遲速あるに依て強く窮ぐるし故に今

書の列る其花本基一般のその或ハ

花形の似たるもの或ハ順々に並

譬ハ江戸樓間楊妃ゑんどゝ名る

桐谷の寔なまゝ桐谷の部の次に

屬を

童蒙見分安かしめんが為凡例の

奥小花形紙圖し紙小其所くの
文字紙摘る且毎品本文の頭小花
形紙摸写し

櫻品

怡顔齋松岡玄達先生撰

目錄

○彼岸櫻　單　婆　重
○糸櫻　大　小　芳野　千葉
○熊谷
○婆櫻

○兒櫻
○芝山櫻 一名鷲尾
○帆立櫻
○駒繋 并駒爪
○小櫻
○殿櫻
○逆手櫻
○帆掛櫻
○山櫻 紅 吉野 白 山桐谷
○白櫻

○雪山櫻
○薄墨櫻
○江戸櫻 大 小
○江戸法輪寺 一名法善寺泰山府君
○樓間櫻
○一文字
○桐谷 一名八重一重 軒逐
○法輪寺
○海棠櫻

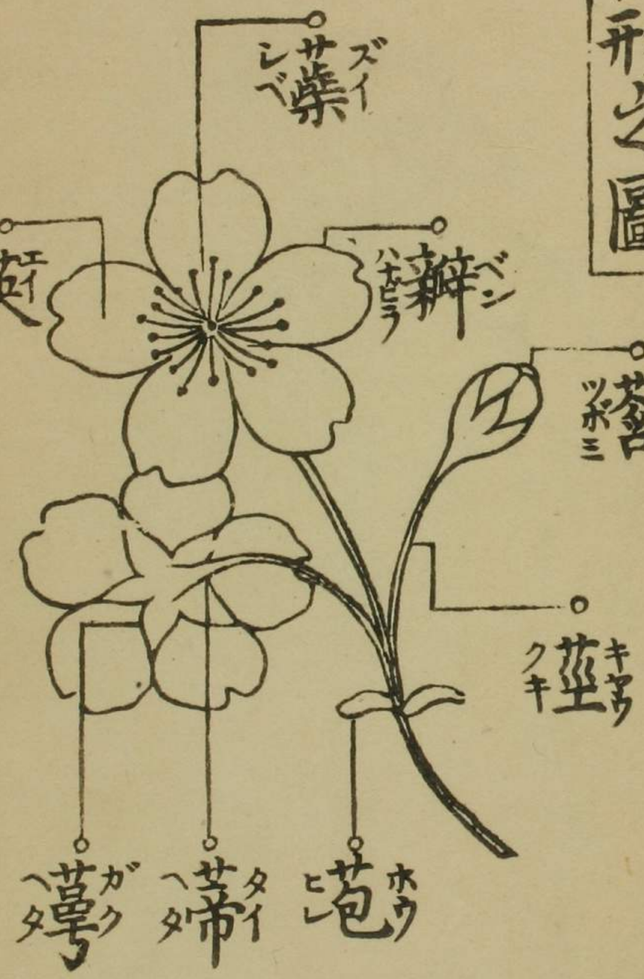
○千本櫻
○浅黄八櫻
○樺櫻 一名白樺
○楊貴妃
○手毬櫻
○九重櫻
○樺櫻 一名黄八稜
○爪紅
○有明櫻 常重
○糸括 一名大手毬

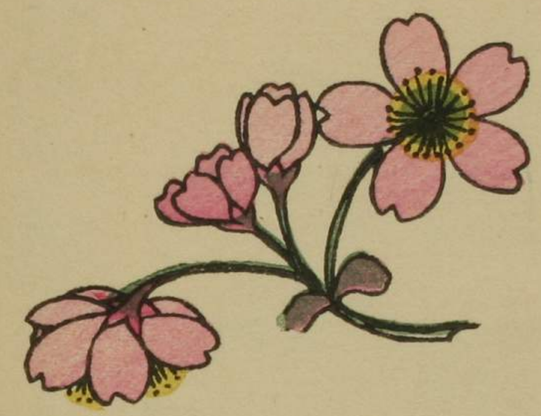
○提灯 大小
○照君櫻
○緋櫻
○虎尾 光紅
○真櫻
○五所櫻
○香日櫻
○薩摩緋櫻
○泰山府君
○外山櫻

○曉櫻一名明星櫻　○普賢象
○犬櫻一名奈天上滿　○瞿麦櫻
○鳳來寺　○鹽竈櫻
○名嶌櫻　○大膳櫻
○伊勢櫻　○奈良櫻

○遲櫻
○不斷櫻一名若木櫻　節會櫻　十六日櫻　并三度櫻
重櫻
以上六十有九種

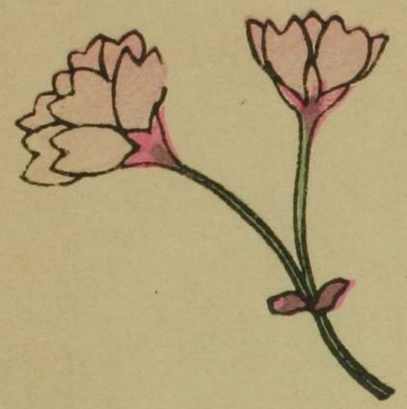
花形之圖





彼岸櫻

○怡顔齋曰開花半最早〻二月末の節ゆ開く是則海棠の譜よのそ品最の早き海棠あん枝の頭よ叢生び地膚枝葉のど花莖ひ〻草也

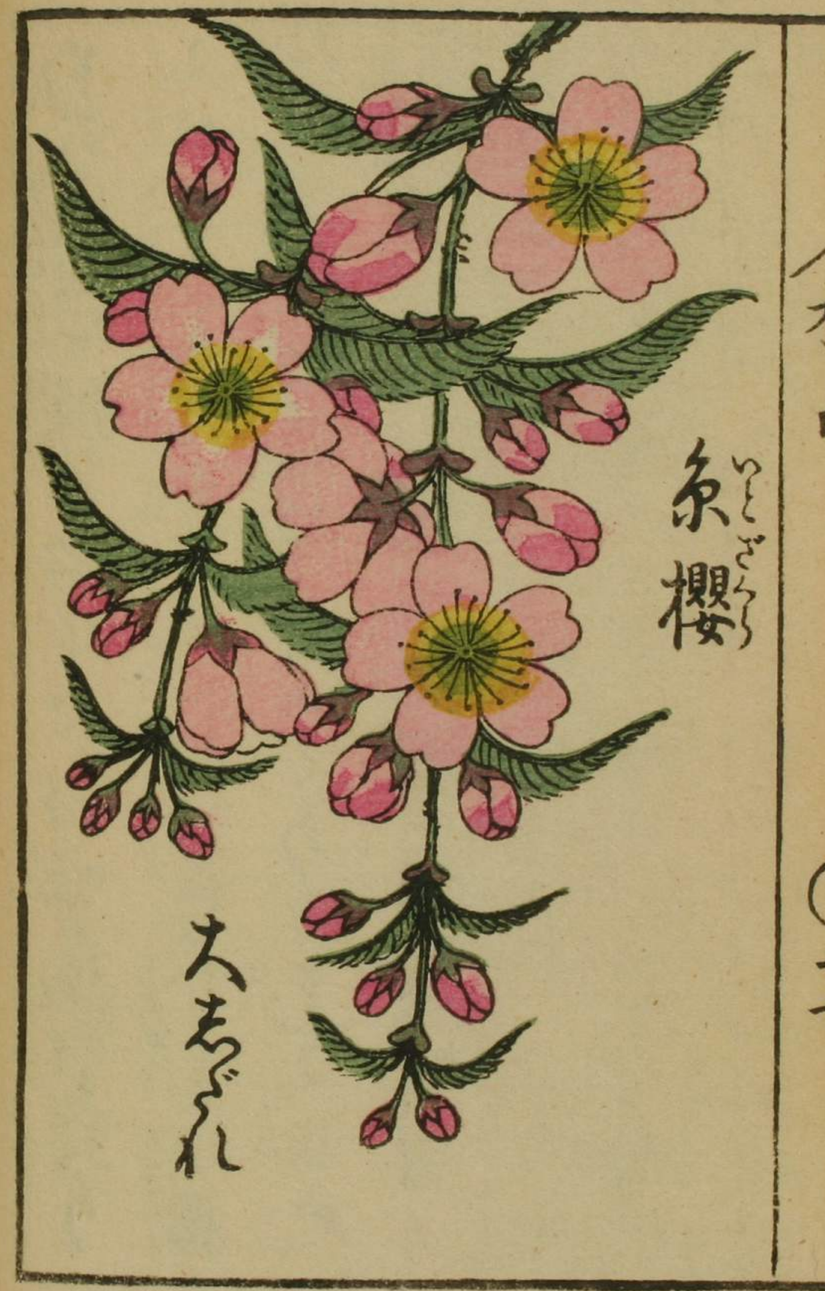


波安彼岸

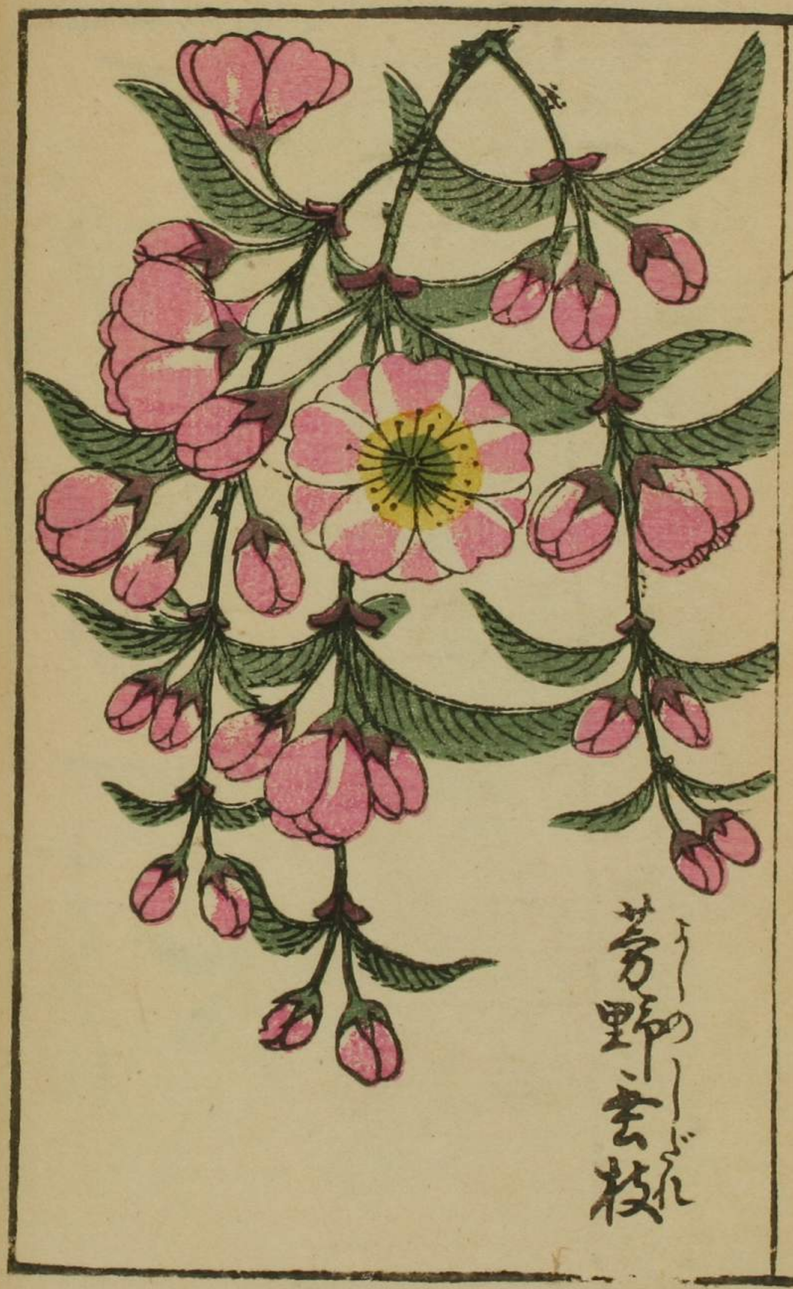
八重彼岸

又彼岸と八重の二種あり彼岸い
葉ふるくして花開く多落し花疎也
八重彼岸い重辨多く多くは此草辨多
その試彼岸櫻しいふ如三種あり
又法華経櫻譜ふ曰二月彼岸ふひく
葉ふるし花小しく裏開ぐ草多
芝微し長く花密ごとくに牡丹齋云

花い則彼岸彼岸也法花唯二種のいつり
又貝原篤信花譜曰彼岸櫻本名小櫻
信よ花試彼岸櫻しいとあり花又非也
小櫻い山櫻の一種也児櫻こそ彼岸櫻と
同本也小と児と同音ゆく別種也但
小少作るい小櫻也児小作るい児櫻と呼ぶ


糸櫻
大きぶれ

小きぶれ



芳野しだれ桜

千葉糸桜

○怡顔齋曰彼罌櫻と一時小開くあり又
雲枝櫻ともいふ花園小地接とする和
ありて花ふつとくく落色あり津國
池田末の道の名ところまろい色白きあり
京地よりくく花まあるまばゆ地の糸
櫻と同事也彼罌接と花全同但枝梗柔軟
長くめくく柳の枝のごとし

夫木集　後頼

あをもみまんまろう接の枝かそこ
柳のくふむをびまてる事利

住昔黄蘗の唐僧小訪同せしふ雲枝
海棠といふ接雲枝海棠の名海棠の
譜より出洛陽花木記小雲絲海棠一名
輭條といふ今の糸櫻の形状より合せり

さてはまた二如亭群芳譜垂糸海棠の下小西府海棠に出しく枝茎やゝ紫しといひ枝はきゞも西府海棠に似たり紫糸といふも枝の紫色ふゝ花苞の中より糸に成吐出しく其さきふゝ花の紫色をいゝて見くるまれば紫糸に成今の櫻の赤色めくゝ独糸櫻に成さきふゝ

あゝ唐僧偶糸櫻をたゝく紫糸に成より翠くさゝつせぎ色也糸櫻に軟條にして紫糸にあゝ撫海南園史棠棣の條に紫糸海棠小棣棠花の似るほとあゝ附い今の櫻の中の江戸相合仲勢等に成接を幸ゝ明也畢竟今の撫海棠の一種みゝく撫にあゝ櫻に即櫻桃にして今の

ゆすら梅と雲南と類自別也又桜雲南
海棠二種あり日名別也一種は古来
種とする所の雲南也一種は今の櫻是なり桜
行厨集花木門に雲南海棠の條云
吐蕃国中花は似地棠花と云今の桜
皆芝長く下へ垂る枝のまばらく
事小あり海棠譜及図経法はい居

雲南海棠と云居るものは今の雲櫻なり
行厨集はいつ居の諸の桜の事を居事
分明也近世大德寺覚印禅師唐僧まさ
上言雲南海棠は諸櫻の通称也重説ふ雲
南ゼハ八重櫻の事也と是行厨集の説と
合せり　敬義の櫻瓣も説く櫻桃は
もつく日本の桜とせり桜はするとも櫻桃は

しく本より佐久良ふあるべきなるべ
櫻名日本私ふ名付る所ろく中華の
樣よあるべきは也世人日本ふいつる所の櫻い
諸越よある事多ふ明ちるべくもたよ
あるべ全き事明也携李仲遵王洛ガ
花史曰沈立海棠ふ記ふ江浙間又有一種
柔枝長蕊帯顏色淺ふ垂英向下謂之

垂絲海棠又祝穆ガ事文類聚ふ

垂糸海棠　梅聖喻

要ス使ニ吳ニ同ニ蜀ニ須ニ着ニ線海棠臙脂色
欲ニ滴ニ紫蠟帯何ニ長夜雨偏ニ宜ニ著春
風一任ニ狂ニ當時杜子美吟偏ニ獨ニ相
忘ニ

同　　楊廷秀

無波可照底須窺與挿爭嬌也學
垂破曉驟晴天有意坐香新曬一
鉤糸

○活所花譜曰具花波婆樣と一時よ
同く枝挿のごとし花彼岸樣のごし彼岸
樣を莫〻く糸樣と接則彼岸と

同挿也

○怡顔齋又曰蕊花園より雜糸樣と
つゝのあり色軟條海棠也元来雲枝と
雲糸八同者なる故世人色小惑の既貝原
篤信ぎ雲糸式糸櫻とさゝせい非也

○稚氣永曰又古野老ぶしとゝのあり花
中弾ゆゝく八重なり葉も末も常の

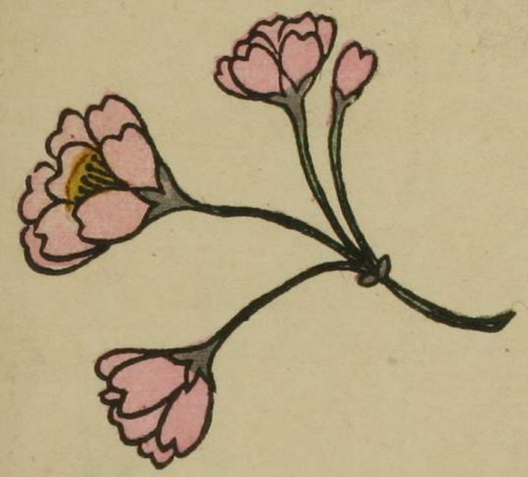
山櫻ハ葉ハ丸く長く厚く毛多く櫻のごと
又大きくれハ小きくれも大枝黒い全体の
木こいし小きくれい枝柔ら柳のごと
細くまるやハ葉るもの也

熊谷櫻

○怡顔齋曰二月彼岸頃櫻の後小咲花
瓣尖あり盛とあるく
小菊の蕊ハ似くさき
おしい赤くあるく葉
かゞ小白くあるあり又
熊谷と名付る也

熊谷直實と平山武者所と一の名の魁
せしなどこゝろく名付又云或人のいはく
千葉のこのあり喜梅花小似ゆとぞ色
熊谷ゆあるべし則芳花園小似
楊貴妃桃櫻小似小〻又草雜
大輪ゆく色和漢式第〻芝山と云
ものゆ似ゆを熊谷とゆべそ又非也

色ハ逆ゆ稱といふものゝ
○活一取義曰櫻花の魁なり二月花紙
開く彼岸稱ゆ先ぶらく花小〻て重
色微〻赤〻也



婆桜

○怡顔齋曰彼岸櫻と一般也但紫おき式仮名ちがく多有如と歟和訓通を活所羅櫻譜よ見へし

○活所羅櫻譜曰岩短花密く貼紫おし〜者多婆の歟なしの

葉みうつく名付る也花彼岸樣よ後まそ咲

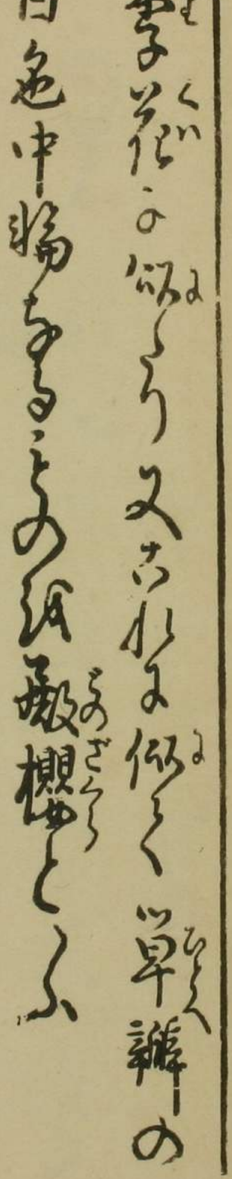
○延永曰花開く素相谷より遅し紅樣

江戸樣と同時ふ咲但彼岸樣の條よ演る

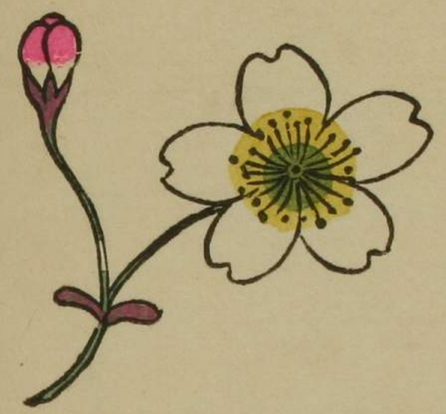
婆彼岸と仕婆桜い別也

児櫻

○怡顔齋曰熊谷は重瓣にして熊谷の花瓣の如く開く児櫻の門へ抱へあり草の小輪白色にして花疎ふくらめく洛西仁和寺の門下東側より一株あり花小く強



李花の如く又杏花に似く草瓣の白色中脹るゝ敷櫻とす



殿櫻

○怡顔齋曰児桜に似く中輪なるもの也即児櫻の一類也花瓣單の白色五瓣のもの也児桜い小輪殿櫻い中輪にして芝山の次ふ開く則芝山の変にして芝山い大輪也

芝山櫻

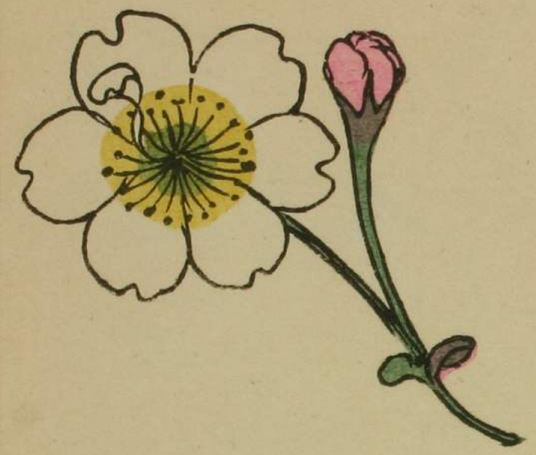
○怡顔齋曰ハ單瓣大輪白色なる殿櫻い又瓣ふて芝山い六瓣也芝ふるく分芝花園ふ云ハ單瓣大輪白色のもの式鬱尾といふい芝山い相似く花三重瓣なるといふ

頭ちゝく所し詰問をしゝ芝山鶯る尾
全一扣二多ハ見ちゝとこ山樹芝山家
ち出ぢも又芝山ふゝく生ぞるもゝ云
但八重ゝも一重ゝもいひぐさしたの咲かゝ
ち絮出くなふ出ぬくべ花いまく

逆子櫻

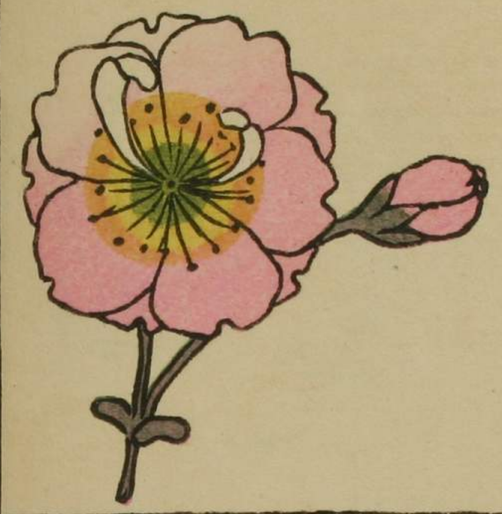
○怡顔齋曰逆子櫻い芝山と同種也單瓣ゝ花形大さ全芝山ふ同但辨ゝある式異ゝこと芝山い色白し逆子い色紅赤し近くゝ見べ芝山と同遠ゝ逆子ゝ

とらいしよく
とあり芝山ばかりなれども又六
瓣の四一所往ひあり帆を立るごとき
もまた故に帆立櫻あるも惑ひ易しまたしも
帆立も白色あり逢ふ帆立ようかし
赤色また芝山帆立逢ふおしるの遠也
只立ばかりなく谷山六瓣の四一瓣ちがしる
ゆへ俗よりは一品逢ふとい



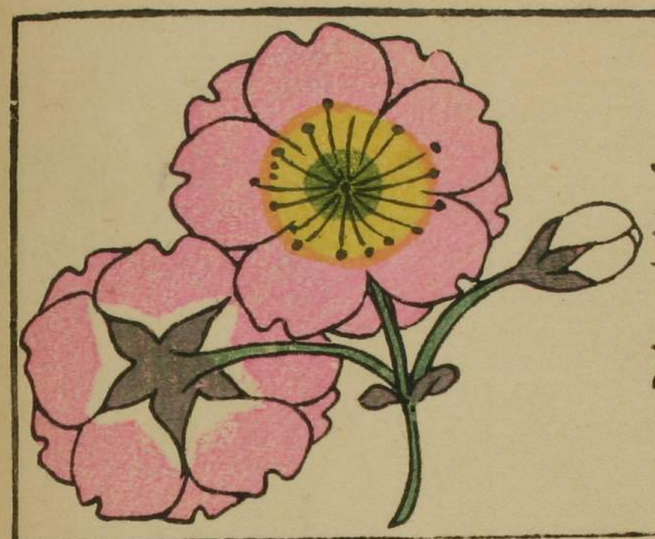
帆立櫻

○怡顔齋曰帆立い芝山
と同種で六瓣で又中の一瓣
帆を立ごとくなるゆへか
号逢ふと惑ひ易し逢
ふいか辨色あり帆立い
芝山と同じく白し但
帆掛といい別種也



帆掛櫻

○怡顔齋曰色白くかゝ
赤こゝろ中ほそして重瓣也
四小添葩二行帆掛ら
ごゝ也故ふ号一名祺櫻
と云
○絶永曰古老云此花を
祺櫻とハ往昔八幡太良
義家奥州伐の時常別久茲郡ふ祺
をこゝ至ひ一株櫻生出ら
故ふ祺櫻と呼ま今ふ其所ふあるとぞ



駒繋櫻

○怡顏齋曰洛東境内小駒田櫻とて重弁し

○絶水曰さゝ小撲とゝい駒繋櫻之中稀にして大白花弁廣く厚し芯たゝく蕊の白いかゝ有を駒田駒繋曰えらく一物也

山櫻

○怡顏齋曰凡山中小多し一單弁あり白色早く開くこの通で山桜と呼ぶ其中小品類又多し花色白の二種あり又花疎小ちゝものあり

大輪もまた小輪もまた葉ふ出神りの時まきして
あさふ淡黄もまた又吉野といふものを
萼より葉ふいでうく赤し三英四英ばかり
かさなり貼ふ山を山相谷といふ大抵山
櫻いとは疎也

山樝子ひとしをぬる人うをふ　仲正
角ばうふ山のうらふ〻そ紅

○活所菊曰一重ふく色白く茎短し
花疎密の二種あり其密なるを和い大輪
ふく相谷ふ似うる又樺櫻と名付く

小櫻

○怡顔齋曰山櫻の一種也
花落ゝあり八重彼岸
小多しく花密く咲
鎧よ小櫻威といふもの
此花色小多しく名付
ゝる也

白櫻

○秘訣曰山櫻よ仰く
色濃白あり單ゝて
辨廣く尤し芝紫共
まし花色雪山櫻と
いふものゝ夫小勝まて
白し芳野山櫻と
いふものあるべし

雪山櫻

○孫氏曰中輪ゆゑに白色なる故雪のごとし但し花形波安櫻小今おなじ様なれども波安櫻とまぎらはしきもの也

一文字

○怡顔齋曰花白色山櫻にて大輪也草辨ゆゑに反も抱もなし花開く花瓣平なり故に一文字といへる也

薄墨櫻

○絶永曰白櫻ふ似く花小く單瓣ゐて瓣細し又白莖如ふもふ薄墨のごとく又伊豫國和泉郡伊臺村西方るの處ふ一株ある日ふのくふ聞伝ふ

花單ふく薄墨色ゐ濃く色瓣大瓣ふく花さき実あるとゑ云ふ名別種なるべし

桐谷

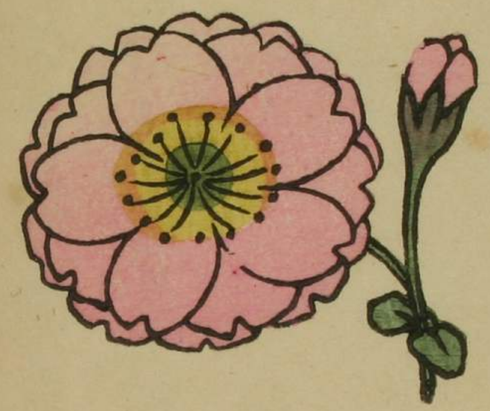
○怡顔齋曰一名八重一重一名車返花中第一品也一枝の中ハ八重と一重と雜り咲其中ハ八重多く一重いとゝ江戸少く色落し江戸ハ皆八重也桐谷ハ八重一重相雜元式ハ鎌倉桐谷より出故名付武古老元式花を一人ハ八重なりと云又一人ハ一重なりと云爭論変じて二人東武返覽ハ一本ハ八重一重

更ニ長文ハ口ハ所ノ義モ合ヌノ車
返ト号櫻中第一也江戸櫻モ此相右ノ変
ヲウサレド相右ノ義花修合ルク変ゴノ
九ツ八ツノ口ハドハ花ノ形ゴ変ゴ枝ガ
ナゴ長ク也ル相右ノ勝ナ長ク活聚
モ櫻ノ第一ノ名ク白色微シ又ク芝最
長シ云フ又泉品堤慈恩寺ノ池内ガ

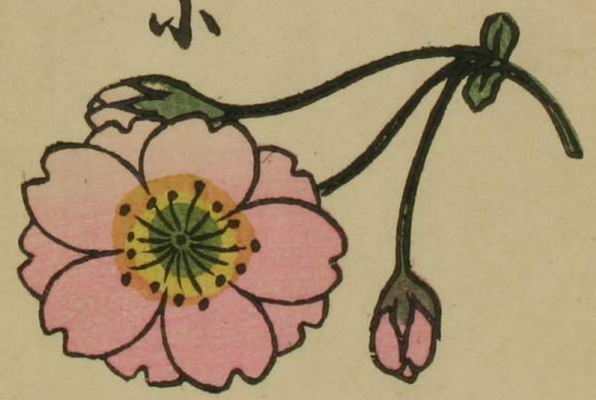
車返ト云フ櫻アリ是ハ品アリ
○延永日津國豊村ト云フ所ノ田ノ中ガ
大木一株ニ花相右ノ八重也年毎ニ一
重ヅク減シ咲ク八年目毎ニ一重アル
九年目毎ニ元ノ八重ニ成リ又八重
一重ニ成ル種類アリ同名別也

江戸櫻

大



小



○怡顔齋曰重雜ハ葉多く莖長く英多く
花相谷の八重咲ハ則相谷の変化なハ
濃しかるゆへ相谷より薄し成ゆえ
葉ハ枝よりこと付也全体の葉ハ
法花の中の冨貴草の如ひろく変
遂し相谷の後ハ咲也又大江戸と
いへる花法輪もの莖のごとく成ゆ

むかしを櫻ちるとい
ふまのうまく蕾の時ち
るをあはれ（あわれ）とし開（ひら）くをべいかしし落（うと）く芝（しば）い居（ゐ）